

212

181

八
阪
社
舊
記
集
錄
上

八咫神社
舊記

集錄
合卷



八坂社舊記集錄序

牛頭之神號所由來尚矣。學者或爲之辨。或爲之考。而未詳其所自出也。蓋歷神之說。原出於籩簋。而籩簋之書。雜碎。固不足取信也。歷神之祀。因以託之吉備氏者。其亦傳會之尤者乎。八坂社勢紀朝臣繁繼君。嘗發憤

乎此。而致乎思也。有年矣。乃奮然表
示其舊傳。徵諸國史家牒。考之東國
通鑑等諸書。就正有道。闡幽發祕。緝
成一家言也。初太古之時。大神之
降靈于韓地也。樂浪之牛頭山。肇基
其迹焉。所謂曾尸茂梨之處是也。
後飛鳥岡本之朝。伊利須使主之奉

仕來也。城之八坂社。實爲之原祀焉。
乃知牛頭之神號。不假乎浮屠及歷
家之說也。章章明矣。若夫顯神于彼。
而歸祭乎此者。記紀及神名式而下。
至於後世。其例廷廷不少。則亦爲措
疑乎其間哉。台州唐興縣。亦有牛頭
山牛頭寺。教大師始所稟承禪法之

處也。潼川郫縣亦有牛頭山。杜拾遺
屢所登遊之地也。郫縣之山有長樂
寺。子美之詩。又有路出雙林外之句。
然則洛東雙林長樂之勝。皆本於
牛頭之神祠。而摸倣之者也。是此神
號之獨專於斯地者。亦可以觀矣。其
言巷社。則證祇園之稱。出於緇徒之

私也。論疫。隅國社則極辨乎世俗滔
滔。誤認此故事。推以爲疫神之。大失
其本義也。其用意之審。可不謂之勤
也乎。古昔瑞籬之朝。天下大疫。死
者且半矣。三輪神告曰。是吾意也。神
史所傳。未曾聞以是遂名其祠。而爲
行疫之神也。况於八坂之大神乎。

惟中世以來。王道陵遲。祠官失其職。而名神大社。多爲浮屠氏所有。焉。淳辭詐僞。所以競起也。何暇於一一論之。方今

皇政維新。治教以興。文物典章。幾乎復古矣。嗚呼。君之此舉也。其安知不出乎穆穆皇皇之神意也哉。

明治三年庚午冬

東武逸民平縣仲敬撰

八坂鄉鎮座大神之記

齊明天皇即位二年丙辰八月韓國之調進副使伊利之使主
再來之時新羅國牛頭山座須佐之雄尊之神御魂齋祭來而
皇國祭始依之愛宕郡賜八坂鄉並八坂造之姓十二年後
天智天皇御宇六年丁卯社號為感神院宮殿全造營而牛頭
大神乎牛頭天王奉稱祭祀畢

淳和天皇御宇天長六年右衛門督紀朝臣百繼亦感神院祠
官並八坂造之業賜為受續

奉齋御神名記

神速須佐乃男尊

中央座

擲稻田媛命

東間座

五男三女八柱神

西間座

五男三女御神名記

八嶋篠見神

五十猛神

大屋比賣神

孤津比賣神

此四座御母擲稻田媛命

大年神

宇迦之御魂神

此二座御母神大市比賣命

大屋毘古神

須勢理毘賣神

此二座御母佐美良比賣命

神大市比賣命

佐美良比賣命

稻田宮主須賀之八耳神

合十三前

東間同座

同

此神西間傍別座

兼曆三

百方記

二

右舊記相傳年久紙面損字彙其本文詳不可知也且去慶應二年丙寅十二月六日社內樓門中門罹祝融災予家亦為焉有惜哉家藏社記古文書燒失過其半矣幸哉嘗有所騰寫因聊抄出以傳焉

慶應四年戊辰六月依

勅命而感神院並祇園之稱被廢八坂神社之舊號復不卜云按六十四代圓融天皇天延三年六月於感神院被奉走馬東遊時神樂歌

神加代乃八坂乃里止今日與利君加千歲乎

計倍始留

記畧云是日太政大臣參向感神院公卿上官供奉中宮職奉幣同社有東遊等使亮從四位下藤原季平云々万葉緯所載云上卿不參參議源惟正卿入行事右近衛少將藤原理兼為使未知孰是

傳來本系帳二通之內羨曆年比追寫焉

家系回

入皇
彦
命
屋主
命

武内宿禰

自是

母山下

景行

成務天皇三年癸酉大命在官二百八十四年

仁德天皇五十年薨三百卅歲紀氏傳曰三百八十歲

見也

兩宿禰

波多臣林臣波美臣日次海臣長谷部君之祖

宿禰

許勢臣雀部

臣之祖

蘇我臣川辺臣

櫻井岸田臣等之祖

木荒宿禰

平群佐和良馬御藏連等之祖

大臣代

真

仁賢十一年為大伴金村被害三百餘歲

父子共為大伴金村連所誅戮

鮪

宇志

四位下

為副將軍征討新羅

紀角宿禰

紀臣紀朝臣角臣坂本臣祖

久米之

貝

葛城長江襲津彥

手臣的生江阿奴那臣等之祖

若子宿禰

江沼臣祖

紀小弓宿禰

雄略天皇九年春為大將
伐新羅

紀大磐宿禰

雄略天皇九年五月聞父既薨
向新羅奪小鹿大宿禰所掌兵馬

紀小弓宿禰

小弓宿禰喪從歸留佳
于角國是角之臣始也

根使主
小根使主
坂本臣之始

紀生磐病祢
紀男磨 病祢
紀盃子臣

紀大人
紀臣訶多麻呂
御史大夫
天武天皇三年拜造高市
大寺司今大官大寺

紀弓張
朱鳥元年直廣肆紀朝臣弓張誅民
官事持統天皇五年三月天皇幸伊勢
直廣肆紀朝臣弓張為留守官

紀重俊賜大紫位
阿閉磨
直廣肆奉膳
紀朝臣真人
贈大政大臣正一位光仁天皇外祖父
紀朝臣諸人
從五位下

紀朝臣磨
大納言正三位慶雲二年十月十九日薨
紀朝臣椽姬
光仁天皇母贈皇太后

紀朝臣
廣庭
為河内介
寶龜二年十一月授
從五位上正五位下
紀朝臣
廣純
寶龜元年十二月從
五位下為民部少輔
四年正月授從五位下
紀朝臣
廣紀
寶龜二年閏三月從
五位下為左少弁
寶龜二年五月為
美濃介授從五位
下

紀朝臣
飯磨
參議正三位左大弁
太宰大貳
紀朝臣
古佐美
正三位中衛大將大納言
太子傳征夷大將軍
延曆十六年四月薨年五歲
紀朝臣
廣
大宰大 大天內藏頭
參議正四位下左中弁

紀朝臣
船守
大納言征夷大將軍
正三位

紀朝臣
勝長
中納言從三位
始名梶長

紀朝臣
田上
從四位下

紀朝臣
深江
從四位上伊豫守

紀朝臣
名虎
正四位下

紀朝臣
靜子
正五位下

紀朝臣
有常
從四位下為周防
權守六十二歲

紀朝臣
有貞
右兵衛大尉

紀朝臣
清臣
美濃權少掾

紀朝臣
修行
本名有行從南都興福
寺修審為僧延長四年
建立祇園天神堂

紀朝臣
春常

紀朝臣水津魚
從三位

紀朝臣
魚員
從五位下

母八坂造女
為平城天皇妃生第二皇女
獻努內親王

紀朝臣百繼

右衛門督

母八坂造女
弘仁十二年正月叙正四位下任越前守
天長六年四月於山城國愛宕郡八坂鄉立園二處給
右衛門督百繼等為奈神地感神院是也

紀朝臣
取弟
從五位下右兵衛佐
母同

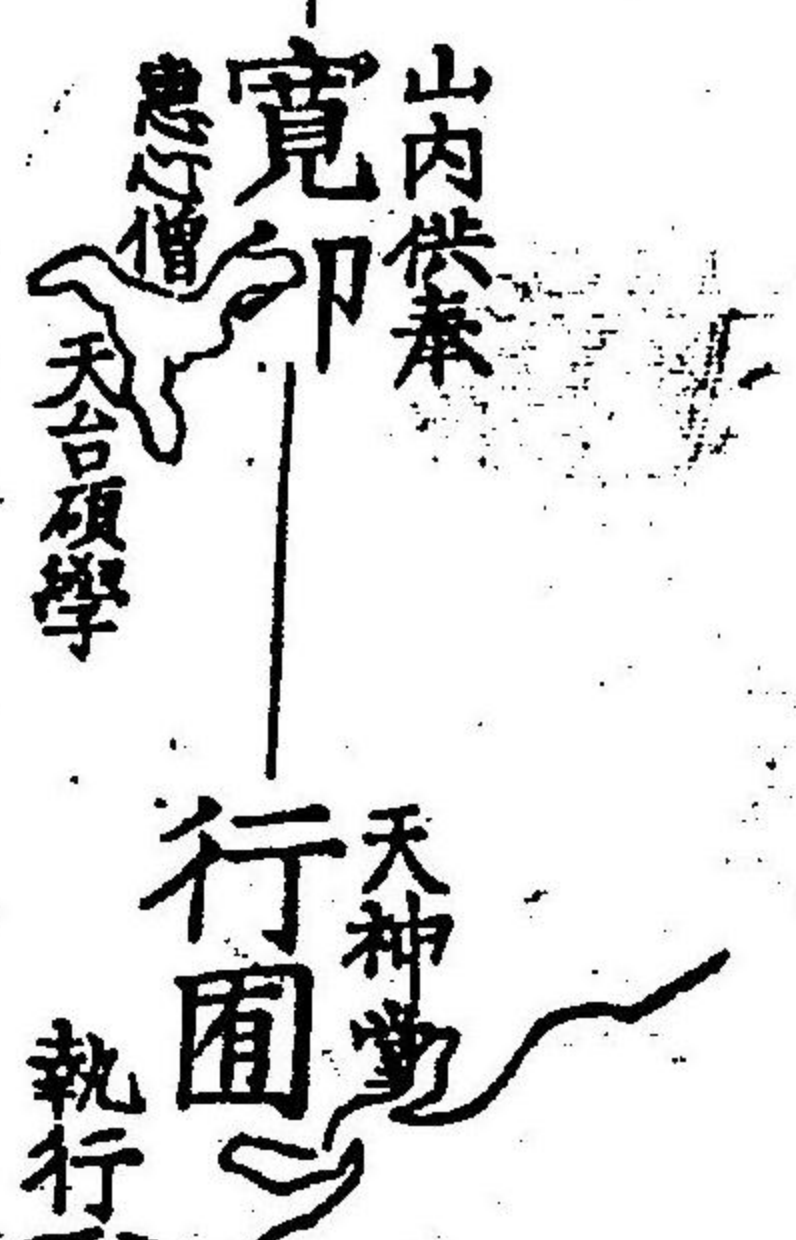
紀朝臣 從五位上為美濃守
諸繼

紀朝臣 尾張推掾
貞繼
紀朝臣 本扶範
貞範
彈正大忠式部大輔

紀朝臣 儒學教照又号紀納言
長谷雄
紀朝臣 儒學參議從三位藏人宮内卿
泚光
母文屋氏能屬文
天慶二年己亥九月二日薨七十一歲

參議右大弁遣唐使中納言正三位
兼和十一年五月父母初於長谷寺
同十二年乙丑三月誕生
延喜十二年壬申三月十日薨六十八歲

紀朝臣 藏人左少弁 紀朝臣
文相 從四位下
山城守越前守
紀朝臣
有方 左中將常陸
執行權長吏兼帶
行



餘畧之

右系帳蓋斷殘考之古書年代或不合且有可疑者然而予家
舊所傳而不為無據矣幸逢 王政復古盛時固忝紀公裔仍
倣古人取諸父祖名以為姓而予亦敢以建内為稱焉併記之
貽後昆云

八坂社舊記集錄上卷

繁繼謹撰

八坂鄉奉齋大神十三前記

第一

神速須佐之雄尊

中央座

亦御名

建速須佐之男命

又神素戔嗚尊

速素戔嗚尊

武素戔嗚尊

伊佐那伎乃日真名子加夫呂岐熊野大神

櫛御氣野命

謹按ふ 須佐乃男大神と牛頭天王と奉称事ハ神代紀ふ
素戔嗚尊帥其子五十猛神降到於新羅國居曾尸茂利之處
と有る曾尸茂利ハ即牛頭の韓語なりて欽明天皇十三年
の紀ふ新羅之牛頭方と見え東國通鑑ふも樂浪牛頭山城
云々又永康元年三月新羅王至牛頭州望祭太白山樂浪帶
方兩國來服と言へる處ふして此大神韓國ふてハ檀君と
頭を給ひ其國をひくも法式と建給ふ事三國史記東國通
鑑等ふ出て古人も早く論置きしなりけふと牛頭山天
王の稱ハ佛書より起と世人のなりけふハゆくりハ僻事
なりとの諸經軌中ふ牛頭天王と云名のなりけふも有事と

一惑ぶらうらも曆家ハ此稱を襲へるハ例の中昔よりの陋
弊也けり如是明徴なり事とせくの物知り人等の辨へら
れざるハいさふぢや

第二

櫛稻田姬命

東間座

亦御名

真髮觸奇稻田媛命

櫛名田比賣命

稻田宮主須賀之八耳神之女而須佐之男尊之御妃と成給
て御子神降誕給ふ式ふ山城國相樂郡綺原坐健伊那太比

賣神社又備後國安那郡多祁伊奈太伎佐耶布都神社同國
深津郡須佐能袁神社あり又能登國能登郡久志伊奈太伎
比咩神社ヤレも有リ出雲風土記小久志伊奈太美土與麻
奴良比賣命云云

第三

神大市比賣命

東間座

古事記曰須佐能男命又娶ヒ大山津見神之女名神大市比賣
命生子大年神次宇迦之御魂神

第四

佐美良比賣命

東間座

佐美良神祭見延曆儀式帳蓋伊雜宮同座之神也又式隱岐
國海部郡奈伎良比賣命神社相傳以為此神也此神須佐乃
男尊御合坐生粟皇子速須勢理比賣二柱神旧記小見之
り舊記又載備後風土記所謂蘇民將來之女者即此佐美良
比賣命也といふ説見下卷

第五

八嶋篠見神

西間座

亦御名

清之繫名坂輕彦八嶋手神

清之湯山主三名狹漏彦八嶋篠神

八嶋士奴美神

第六

五十猛神

同座

亦御名

大屋毘古神

伊太祁曾神

又五十猛有功之神

第七

大屋比賣神

同座

亦御名

大屋津比賣命

第八

抵津比賣神

同座

此五十猛神大屋津比賣命抵津比賣神三柱神紀國所座之
大神也八嶋篠大神以下此四柱御母神攝稻田媛命也舊
記小見少寸按稻荷之攝社四之大神者祭此四柱見古書
四之大神又曰八嶋社為地主神也紀伊郡之名由此神等鎮
坐而起云併記以備考者

第九

大年神

同座

亦御名

大歳御祖命

此神御子御歳神者祈年祭所齋者也事詳祈年祭祝詞古語
拾遺等神名式山城國乙訓郡大歳神社大月次 新嘗この外ふも
大歳神社國々見えたる中ふ駿河國安倍郡やうの大歳
御祖神社といひ是と摠國風土記てふものに大歳御祖神
者誉田天皇四年癸巳始祭之也といひるに次下ふ大
歳御祖神号玉依姬賀茂健角見命之女也といひるは後人の
御祖の二字ふよりて附會する説ふて實は大歳神の賀茂
ふいぢづらぢる事を弁へざる謬なりその國の淺間新
宮の村主氏所藏の駿河國神名帳ふ安倍郡ふ大歳天神小

歳天神の二名と奉られしにても小歳ふむうてい
る御祖の文字やうともおひふ一歳天神は古事記ふ
所謂御年神やうて古事記ふに明ふ大年神の御子に御
年神すゝめと記されしに古語拾遺ふ御歳神の御子
伝くといひて其御子名とも志されけりは大歳神を御
歳神と紛マシる上古の一傳ふて即ち祈年祭祝詞の御歳
神も正しく大歳神といひる事著しむに次ふ載する八神
及び座摩生嶋等の祭りも全く拾遺より出たる名やうを
やさてい式やう大和國葛上郡御歳神社名神大月次 新嘗とい
るも大歳神なること疑なく此義とも辨へて或人の

祈年祭祝詞小大歳神と奉さるると訝くおのりまゝに
いふ事よりかゝり猶別小委さ考あり

第十

宇迦之御魂神

同座

此神者與神代紀所謂伊弉諾尊之兒倉稻魂命為同名異神
矣不可混也

第十一

大屋毘古神

同座

亦御名

粟皇子道主命

又神乎多命

此神者與紀伊國所坐大屋毘古神亦為同名異神耳非再出
也說詳下卷

第十二

須勢理毘賣命

同座

亦御名

若須勢理毘賣命

又速佐須良比咩命

此神大國主神之御嫡妻也出雲風土記奈賣佐社神門郡滑
狹郷郡家南西八里須佐能袁命御子和加須世理比賣命坐
尔時所造天下大神命娶而通坐時彼社前有磐石其上甚滑
之即詔滑磐石哉故云南佐云神名帳神門郡那賣伎神社同

社坐和加須西利比賣神社

已上第五已下至第十二須佐乃男尊之八柱御子神於我八坂社則是奉稱五男三女神也俗云八王子者蓋後世謬傳也
第十三

稻田宮主須賀之八耳神

西間傍別座

古事記云於是喚其足名推神告言汝任我宮之首且負名號曰稻田宮主須賀之八耳神日本書紀云賜号於二神曰稻田宮主神也二神者脚摩乳神手摩乳神也

右當社奉齋御神總十三前

因論須佐之男尊高天原小登り坐して天照大御神と御誓

約の事有りて先小多紀理毘賣命市寸嶋比賣命田寸津比賣命の三柱の女神を生ず後小正哉吾勝勝速日天之忍穗耳命次天之菩早能命次天津日子根命次活津日子根命次熊野久須毘命の五柱の男神を生坐し時小於是天照大御神告速須佐之男命是後所生五柱男子者物實因我物所成故自吾子也先所生之三柱女子者物實因汝物所成故乃汝子也如此詔別也此詔言ハ 皇紗小係了大事ふて神典と讀者の一大眼目と中昔より此方佛家の徒の私小神典と讀ひらるる一兄弟の神の如く思ひ誤ると云ハ大通智勝佛の八王子小附會一八柱混同して一處小齋

祭もさるもつるハめさるる事なりハ須佐乃雄尊
高天原より天下小始て天降り出雲國小坐一又韓國曾尸
茂梨之處小坐一彼を治り此を鎮めし南海北海までも
巡り治り給ふ神業の奇しく妙なる御事ハ古書小著明な
りと其實の事を得て中昔より佛家の説ふ惑とされ
て天竺の囉王の名を負せ奉り掛卷も畏き我 國神の櫛
稻田媛命を始め八柱大神と波利女八將神小附會一某の
天王をとりし物らいつかハ八將神
といふもの七曜攘災決する黄幡豹尾等の名をさへ附會
しりて言ても知し妄説なるをやし須佐之男

尊韓國小天降一事なり一故小韓神といふと非なり韓神
韓とさの夏ハ別小説ありて此神ふちづらうづらう事な
りし日本漢竺外國と分言と後の區々を見ふしり
れ天地開闢一時ハ皆一國也伊邪那岐尊日神を生し一天
上の事を授ふしりハ日神の照臨一給ふ限りのハ
洲の外瀛海の塩の末までも皆天の下に皇大御神の知食
を國より殊小神代ハ言ふ不及事也然もハ須佐之男尊の
天より下小牛掃坐ひらきに隈もさるる一又韓國牛頭山小鎮坐
一大神の荒御魂と 齊明天皇丙辰二年の秋高麗國の調
進の副使伊利之使主てふ人の奉齋仕り來て 皇大御國

山城國八坂郷今の地ふ奉鎮祭始ハ韓人ナリ故ふ其由
縁を知らぬ人ハ韓神或異國の神ヤと疑ひ惑ふ人も有
づきれとかの新羅の王子天之日矛ヲ持渡り來つる鏡珠
カハ八種の寶を伊豆志之八前大神と祭もつる古事記
ふ見之て式ふ但馬國出石郡伊豆志坐神社八座並名
神大と記
一垂仁紀ふも此事と載て更ふ其出石刀子至于淡路嶋
人謂神而立祠於今所祠也と云垂仁紀ふ又任那國王子都
怒我阿羅斯等ヲ追慕ひ來り童女の詣于難波為比賣語
曾神社至豐後國前郡復為比賣語曾神社と記一此童女ハ
元其國の郡内所祭白石の所化ナリといひ古事記ふも

此事と載て天之日矛の事一其神の名を阿加流比賣神
とも云へり此外式ふも韓國伊太岐神社所くにいでも
豐前國田川郡辛國息長大姫大目命神社乃り豐前國風土
記小田河郡鹿春郷昔新羅國神自度到來住此川原便即名
白鹿春神云々今も鹿春の二字を川原と訓り是式ふ所
謂辛國息長大姫大目命神社あり昔者僧最澄入唐求法の
為小此社小祈願セしも韓國ふ由縁あり故やと一
大隅國贈於郡韓國宇豆峯神社も見之たり又伊豫國風土
記ふも宇和郡御島坐神御名大山積神一名和多志大神也
難波高津宮御宇天皇御世此神自百濟國度來坐而津國御

鳥坐故謂御鳥也。あつとも併思ふ。一後ふも弘法大師
ハ唐の青龍寺の鎮守を移して醍醐山ト祭りて青龍社と
建ト慈覺大師ハ台州赤城山の禪院の鎮守を移して叡蔭
小赤山社と創ト智證大師も歸朝の時海中ト神の告を受
て園城寺ト新羅明神社を祭りて鎮護ト此三社皆素戔
鳴尊ト古人も往くト言り然ト皇國の神彼國
小現出ト彼國人等ト齋ト給ひ時ト皇國ト歸ト齋
ひ祭られ給ふト何の疑ト只ト古の國史及ひ
式家牒等ト自然ト悟り知り得給
ふト歟

東國通鑑卷首云

朝鮮國臣徐居正李克
象等撰九五十七卷

東方初無君長有神

人降于檀木下國人立爲君是爲檀君國號朝鮮是唐堯戊辰
年也初都平壤後徙白岳至商武丁八年乙未入阿斯達山爲
神云云臣等按古紀云檀君與堯並立於戊辰歷虞夏至商武
丁八年入阿斯達山爲神享壽千四十八年云云トハりて韓
國上古より世々ト謬ト遺ト語ト續來ト正ト傳説
也ト蓋檀君ハ素戔鳴尊の御事ト此尊初韓國
樂浪の牛頭山の檀木の下ト天降給ひト因て彼國ト
檀君トいひ世々ト是神尊を敬ひ奉り唐山ト昔より
其聞之高ト御神ト又韓國ト降到給ひト事日本

書紀神代卷小符契密合せる事云も更々抑曾尸茂梨と
ハ韓語小牛と企人と呼又約めて頭とモリと云企人モリ
と韓國樂浪ふらる地名ふて其地と企人モリと呼モリと山
韓語小豆其山より出づる地の名なり 崇神天皇御世の
末年より其山とカサムソイモリ又轉てアンシラ呼
り曾尸茂梨と牛頭の韓語とも云う吾友松浦道輔翁ら
朝鮮の村方貫ら東醫寶鑑藥名解の譯語よりて發
明し出されし奇説也引て証せし云古昔 皇國人專韓語
と用ひし夏王と早岐又健支斯夫人と於陸太后と并於流
上臣と萬加利陀魯又上の音東中の音苦小の音信の類故
舉ふいとまひらけ書紀の私記等あはせ考つて知るし
神人の字ハ日本書紀神代卷天地混成之時始有神人の神
人と同例なり春齋林恕の東國通鑑の序云く朝鮮多種類

云く鴻荒之世檀君開其國云く以我國史言則韓鄉之嶋新
羅之國亦是素戔鳴尊所經歷也云く唯恨彼國未知焉と言
ひ伴蒿蹊ら閑田耕筆ふも朝鮮國初之主と檀君と云ふ是
素尊ふて坐と對馬ふての話なりとかんいり猶此他ふ
も朝鮮の檀君と素尊ふ坐と事と記せる書此彼見えり
神代の時樂浪牛頭山より檀木の下小降坐一時其神靈不
測かるともて故神人と言へり檀木ハ木名麻由美と呼ふ
樹と普通漢名の檀ハ充ふ
了支分れど此文の檀
ハ所謂構檀と云ふ和名抄曲調類小高麗樂曲中小蘇志
摩利の曲名と載り谷川士清の日本書紀通證小蘇志摩
利の遺音載在仁智要錄仁智要錄ハ仁和寺書目小見えて
藤原師長公著せり也公建久三年

五十六歳ふて薨一給へとい源順朝臣の卒一永觀元年
りい百五十余年後の人ふて尚其遺音を傳へぬまへま
今人知人今按曾閱其舞之圖著蓑笠屈折蓋摸素尊流離辛
苦體一言一神代紀一書素戔嗚尊結束青草以為笠蓑而
風雨雖甚不得留休而辛苦降矣とい
て士清氏と素尊の流離辛苦の體と摸せりとい
またと恐らくは須佐乃男尊樂浪の國人小田圃を營
耕穡を教へるを後漢志小
田圃を營
耕穡を教へるをと摸せりとい
大嘗祭式小巳日多治比氏奏田儻と
了も耕穡と重しむる意なり
欽明紀十六年春二月
百濟王子餘昌其弟王子惠と遣一其父明王々新羅の賊の
為小殺されし事と奏しと條は蘇我大臣の王子惠小語れる語
と載て曰昔在天皇大泊瀬之世汝國為高嚴所逼危甚累卵
於是天皇命神祇伯敬受策於神祇祝者廼託神語報曰屈請

建邦之神往救將亡之主必當國家謚靖人物又安由是請神
往救所以社稷安寧原夫建邦之神者天地割判之代草木言
語之時自天降來造立國家之神也頃聞汝國輟而不祀方今
悛悔前過脩理神宮奉祭神靈國可昌盛汝當莫怠云是ハ
雄畧天皇二十年高嚴より百濟を伐て甚危うりとい天
皇の大命ふより神託を奉て天地割判一時小天降坐一其
國家と造立給ひ一神と屈請て往て救しめりといに末
多王東國通鑑卷四
卒太小作國小還りて其祭祀と修一うと社稷再
ひ安寧かり一由也天地割判の代素戔嗚尊韓國小天降り
其國家と造り立給ひ一事と神代紀並小東國通鑑等ひら

併せて知るべし彼國人も告知らるる語り故ふも

建邦神との云ひて素尊の御名を稱せざりて

古事記冲哀の奈皇后の時爾以其御杖ツクシ立新羅國主之門

即以墨江大神之荒御魂為國守神而祭鎮還渡也

も合せ思ふ按るに古くは彼是往來一貫と

我は大奈母知少奈比古奈命也昔造此國此國記去往東海今為

執公本倭人初以帆渡海而來故号焉此類猶許多有考て知べし

御國小顯坐一間の功德といとも可畏一名は奉る

事々更小韓國小到坐て其國人を教導給ふこと一千

有余年して神徳全成りて大御身を隠給ひ後ハ直其荒

魂和魂と頭幸い賜ふと以て入阿斯達山為神と語り継

記傳もるり上ふも委曲く説ころ如く素尊の御

坐樂浪の牛頭山カクンソイタルサンと呼ハ三韓鼎峙してよ

り後の名ふて古ハ企シモ呼ヒて天智天皇

五年小高麗國の伊利之使主ら皇大御國小來て山城國愛

宕郡八坂郷小其神祠を建ツク時至誠感神の字面を擇用て

感字小カサム告ツケの韓音を充て神字をソイタルサン切音小充て是

と感神院と名附て其神の御正躰を最大牛頭山天王と

稱ふるハ梵漢並舉巧致小協カサムいて東國通鑑ふるの任那

了牛頭てふ人と文工而意盡と稱カサムが如く伊利之使主

十三

う意を立て感神院牛頭天王と號けり。ハ實小工文盡意の徽號と稱へ。然るに感神と牛頭と各其字音の聞かれぬ。後に後の世の人ハ其本の深意を知らば種々の異説と言迷と。書著せる事恐へ。歎息と。抑す。祇園の稱號ハ前文小云へ。じ。天智天皇五年より後二百六十年。延長四年丙戌六月廿九日甲寅供養祇園天神堂修行僧建立之。此本文ハ日本紀畧第一卷不見之。然るに近世の名高き人ハ此文を引て論せ。祇園ハ古より社記延久三年災焼の事有りて書記多焼亡なれど。簡もま。鮮ら。其遺文中ハ坂社致齋の神事ハ天長年中より始ると記。又元慶年中の文小。陽成天皇元慶三年堀川十二町以流為神領之敷地。御寄附有之以材木

商人等被補神人。之以來既四百歳御寄附之盃賜と記せり。又百練抄。延久三年十月十四日感神院焼亡。同十月廿八日祇園焼亡と有り。是等を見て感神院と祇園と別。處の明証とす。陽成天皇御代の頃より。白川天皇御代の頃までの御教書勅裁論旨などの。寫。ハ感神院社家との有りて。永保年後。堀川天皇御代の頃より。社僧と記せり。祇園の号ハ延長年間此方の名。然るに感神院も祇園も混して一。ハ延長年間此方の名。然るに南都圓如が建立と。ハ廣峯より遷。ハ。ハ皆古を。ハ。ハ。祇園ハ所謂る巷社。ハ感神院南大門より南一町半計り中路の西側。ハ在り修行。ハ此社を創建。ハ僧の名。ハ大系圖。ハ藤原秀卿の子文行の子公光修行行禪。ハ行禪の傍。註。ハ推律師祇園別當と有り。公光ハ文行の後と兼け修行行禪。ハ僧。ハ此社と建立せ。ハ修行。ハ次て其別當。ハ

こゝ明白されば此七字ハ修行の名下ニ註し語を
と左の傍の行禪の名下ニ附けしる行禪ハ修行の弟か
ら天台宗ニて睿荷別當の後と美れど二僧の下各此
七字あり其一と脱しふも有るべし日本記畧第
十一卷ニ寛弘元年五月三日庚戌今日執行聖人行圓供養
建立一條堂か有る執行の字と思ひ紛ふべし紀畧
に修行ハ大同元年建立し山城國宇治郡山階郷の
山階寺一名八嶋寺藤原氏の建し陶原より山階寺とい異なりの僧より今昔物語ニ
祇園ハ本山階寺の末寺ニてせん有りきとありふて知
るべし八嶋寺即山階寺の僧の祇園天神堂を建立しるハ光

仁天皇第二の皇子早良親王八嶋陵の御靈の爲ニ建立し
る山階寺の僧されば其御靈を和め奉じ爲ふ光仁天皇
の御母紀椽姫の御宗家より紀氏の世ニ齋を奉り守り居
る感神院の境傍ニ別小此天神堂を建立して感神院本社
の御靈賜りて彼親王の御心を直く和し坐して善し御心を
振起し給ふべく物しるべしと康和長治の頃よ

り祇園御靈會有るにても知らるし椽姫ハ紀諸人の女
り麻呂の子飯麻呂の子紀古佐美古佐美の子紀廣演廣演
の子百繼八坂造真鉏の女真巢子と妻として八坂造の家
他小男子より故天長六年四月十六日右衛門督紀朝
臣百繼等ニ感神院を賜りて八坂造の業を受續しり
る予家系ニ此支記有りて明白なり日本逸史ニ山城
國愛宕郡丘一處給右衛門督紀朝臣百繼等為祭祀神地ハ
十五

坂造の支次 感神院盥觴ハ 天智天皇六年小創こく、
卷ま詳り 前條の如くさに二百六十年後小當りて延長四年六月
巷社やう 祇園天神堂と建立了ま支本文明白り然と世説
小感神院祇園牛頭天王ハ貞觀十一年或十八年に南都の
常住寺圓如上人ら播磨國飭東郡大野莊廣峯社より遷し
て初ハ荒町の松樹下小在り是と祇園社と稱ふ其後藤原
基經公其殿宇と壞ち運びて神殿精舎と今の地小建元慶
年中神殿精舎全く成就て感神院と稱し奉り精舎を觀慶
寺と云貞觀年中小始りて元慶年中小全成就し故と
以て名と觀慶寺と云ひ一名と祇園寺といふ祇園神の神

宮寺也と説けり人も有り今其説のもげく處を考ふるに
萬壽二年中小常住寺の仲尹が説ひ出しる例の詐妄ふて
正史實録の本文と知らず貞觀年中より御靈會の事は
て祇園社小も御靈會はりし此を貞觀年中我ら住む
寺の師圓如が勸請也と言ひ誘はりしものやり然も當時
いま觀慶寺や詳くと次卷小説へ播磨國峯相記小
吉備公歸朝日於當山奉崇牛頭天王歷年數為平安城東方
守護奉勸請祇園荒町以當社為本社也又改曆雜事記小
聖武天皇天平五年三月十八日吉備公歸朝於播州逢天王
貞觀十一年始天王從播州遷坐十八年作社也と言ふま

とて古書小徴か事ともやう又廣峰山社古文書小播
磨國廣峯山祇園本社也自今以後可停止守護使乱入之状
依鎌倉殿仰執達如件建保四年八月廿八日信濃守判と有
るよし共小神社啓蒙小記載とて建保四年丙子ハ萬壽
三年丙寅より百九十年後ふれば既小萬壽二年中常住寺
仲尹が妄説小欺うれしにて論ふは足らぬ當社舊記曰
播磨國廣峯社者當社之神領也同國土山庄弘次郷別府郷
亦神領也其事分明不特一社之舊記正和以來繪旨院宣將
軍家御教書等相傳于今焉近世為説者以當社翻為廣峯之
末社既以筆書不可開之乎といひ當社舊記の内廣峯社小

附に勅裁繪旨院宣の古文書數通有る中に其一二と舉ぐ
播磨國廣峯社の事全奏聞之所下司長重法師子息貞長法
師並公文長源土民俊賢以下輩於不叙用 院宣云く所存
之企為事實者太奇恠難道遠勅咎上者早 被仰武家可有
誠沙汰不可後悔候也加下知可注進子細之旨被仰下候状
如斯建武四年四月廿五日大藏卿雅仲判祇園長吏殿又祇
園社御師僧都頭深代實晴申社領播磨國弘次別府事右當
所者 仙洞御祈禱料所頭深拜領無子細之處有晴能禪以
下之輩相語守護被管人等捍妨之間神用闕怠希代珍事也
然者早被成下嚴密 院宣於武家被停止守護方違乱全知

行弥欲抽御祈忠節仍言上如件永和三年十月日教行判播
磨國廣峰社領同國土山庄事右當庄者建武年中御寄進地
也而神主範長沙汰致之處為罪科之間度々施行訖當社者
頭深為社務之條勅裁以下分明也縱神主雖無其誤為上官
致奉行何有子細哉況已其身犯人上者旁以無相違者也頭
深可令執務之狀如件康應元年九月廿一日從一位源朝臣
義滿御判又祇園社領播磨國土山御代官職之事預申上者年
貢諸公事等如先く其沙汰可申万一不致懈怠之義申候者
雖為何時可有御改易候者也仍請文狀如斯文明十六年甲
辰三月九日林三郎左衛門尉吉次判寶壽院御坊前ハ社務
寶壽院ト

此外數通書有まとも畧之廣峯社當社領の始ハ 花園
天皇正和年中より御寄附となり 後土御門天皇長亨年
迄凡百八十年間神領也是亦依て廣峯社より年租又ハ神
事用途迄右社より貢有り支分り又同社宮仕下司人迄
進退の沙汰當社より支配し書記明白也是等と考ふ
れば當社の廣峯より移り社ふてハ明証あり
然ると諸説曖昧の甚しハ實論ふ小由と云ふ
又古ハ諸國小御寄附の神領田租あり支分り中昔小
も 白河天皇兼保年中准鴨社例十三膳の日神供と被獻
地近江國蒲生郡成安保同國坂田保又守富保後此守富保
と三分て

真第三人不與一山上保
宮川保成安保と云ふ
丹波國多喜郡波く伯部保又備後
國小童保等兼徳二年小末代退轉せしむらん為小其保
くと長日神供料所として寄附せられし支舊記ふとて
れハ廣峯社の事も是不同しかり又二十二社註式小
牛頭天王始垂跡於播磨明石其後移廣峯從廣峯又移北白
川東光寺其後陽成天皇元慶年中移感神院と有り先小
引る峯相の記と矛盾せり嗚呼偽と作る者疎畧牴牾何の
常ちあらんや或説小廣峯社ハ飭東郡國衙庄白國村なり
白國神社より遷せしむらん白國と即ち新羅ふて此社を
三代實録小見えし速素彥鳴尊の御社かりといふり天

野信景が牛頭天王辨小按舊記始崇西峰 圓融天皇天祿
三年遷御于廣峯と有るハ延長四年山城國祇園天神堂建
立より四十七年後小廣峯小遷もる支明白とていふて
る廣峯より移しつゝいひし廣峯を祇園の本社なり
かと言ふ由りむや北白河の東光寺の事ハ日本記畧
第一卷小延喜十年五月十日前二條皇太后七日法事於東
光寺修之と有り第三卷天曆二年正月十七日丁卯東光寺
焼亡陽成天皇后宮御願也と見えし百練抄第十卷小建
久三年十月十日己酉白河東光寺の邊火事餘燼附法勝寺
之五大堂即打消了とあり元慶元年丁酉より百九十六年

後壬申と天祿三年と云元慶年中ふいせし廣峰社より元
慶ハ 陽成天皇の御代の年号也其 天皇后宮の御願の
東光寺より何て近江の朝ふ成し感神院に移べき由り
ひ是ハ白河の被殿も悪解除善解除の故事ふ因て須佐之
男尊と齋奉といふより思ひ寄れりて元亨釋書ふい
へる感應寺と東光寺ふ附會せりあり偽ふよりて偽と添
へ謬ふよりてあやまりをかさねるハ古今の通弊なり隔
月晦日靈所七瀬の御被ハ 後冷泉天皇の御時より初て
行むけり元慶元年よりも百七十年計後なり禁秘御抄夕
拜備急至要抄年中行事秘抄拾芥抄等ふ見えり白河の

被殿ハ拾芥抄ふ靈所ハ川合耳敏川 朱雀門前二條南別稱 東瀧 北白川瀧
松崎石影 西園寺東北野北 西瀧 仁和寺鳴瀧 大井河 傀儡后住土一町仁和三四以在成説註
舟と有る東瀧ふて北白川瀧の下流ふて百練抄第十二卷
に兼久元年十一月廿七日己未巳時白川被殿焼亡及數丁
と云る處なり白河水源と山城と近江の界なり山中峠の
山中村より出て谷の水音浙瀝より右ふ廻り左ふ廻りて
川と云る一里半計西ふ北白川てふ里有り 鹿谷銀閣寺の北なり 其
里の民家の中を西ふ流を東三條白川橋の下と南ふ大和
大路より鴨川ふ入るなり北白川の里の西南岡崎村東端
ふ東天王社有り又神樂岡の本社の下壇ふ西天王社有り

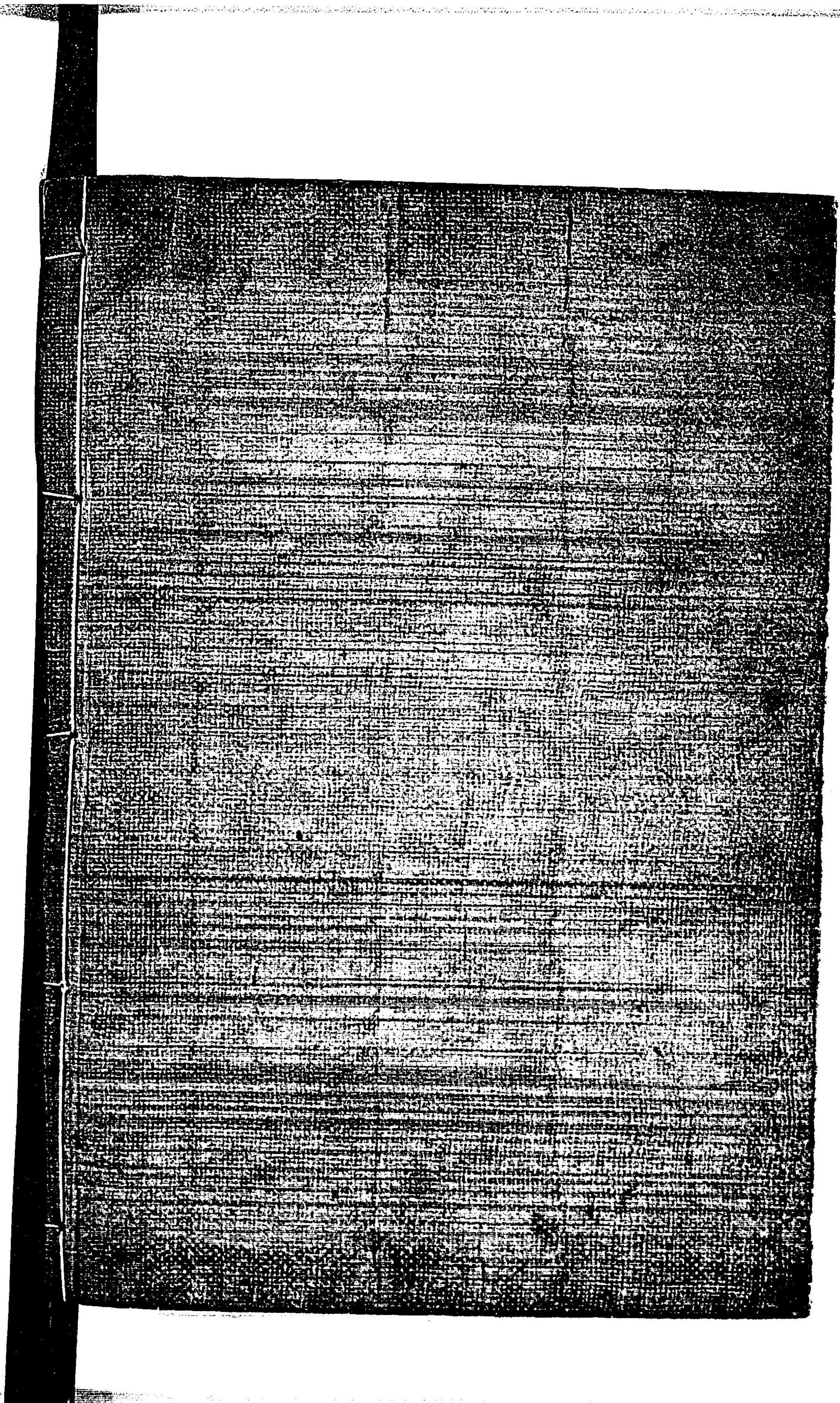
東天王社と一雙の社也といへり共小百練抄小所謂白川の被殿也といふん此と感神院の本所と爲るハ元亨釈書小載しる妄説を思ひ紛へる也元亨釈書第八寺像志小感應寺者一演法師嘗持觀世音像欲得勝地安之廣求靈區貞觀年中到平安城東北鴨河西岨于時此地搖震紫雲降垂蓮花紛乱奇香薰郁演喜而構伽藍以故号感應寺一日老翁持釣竿出河中語演曰我此地之主也自今應為護伽藍神我有神力能除魔障去疫疠又結好夫婦調適產育所謂牛頭天王者也我好眠一歲三百六十日只五月五日醒餘日皆臥端午之朝初起向天吐氣其氣或為雲霞或為雨露觸万不同其所

觸或為藥或為毒或為惡瘡或為疾疫皆是有情之業感也非我強為也言已形隱演錄神言奏朝勅黃門侍郎藤原長良就其地七日夜行道念誦以報神德と有り然とも藤原長良ハ文德天皇實錄第八卷小齊衡三年秋七月癸卯權中納言兼左衛門督從二位藤原朝臣長良薨と記しるなり豈貞觀中小勅を奉むるの理あらんや此釈書ハ當初大手筆の稱はるるも私記臆説を主として正史小乖戾さるるもの多し信むるに足らざること知るべし又伽藍を護る十八神の名七佛所説神咒經小見之て釈氏要覽小引けりその梵釈四王十二將の中小牛頭天王の名を載せ三井寺の護法十八神祠も佛

説小附合せて伊勢大日枝十禪師客人三宮八幡賀茂住吉
春日平野松尾石上武氏香取鹿嶋江文丹生兵主凡十八社
といへども祇園牛頭天王の事といへば宇治の諸經要集
三室戸山科の安祥寺にも此十八神と鎮守といへば諸經要集
小も道世法師云寺院即有十八神護居住之者亦宜自勵不
得怠惰為非恐招現報耳といへば寺院小住居者も又怠惰
さへいへば況や寺院を守り神として一年三百五十九日
眠り臥し給へば盜賊火災風雨鬪諍疾疫の難絶了暇なく
いへば住居僧侶の怠惰を警誡むべきその偽り辨せざれば
て明ありや先代舊事本紀第十二卷小三輪大神曰吾和
魂神牛頭大神從往古來悉宰大地任貧富病快世間疫鬼等
皆此神從徒也午月端午能定其役以五色餅各色茅葉以五

色線各結五處以雙木瓶盛甘辛酒圖馬雙頭副之埋土以誠
精方祭此神者行疫兵乱乍止五穀重穗大登と有るハ其本
と元亨釈書小採りて翻案しる妄説なり彼書ハもと長野
采女在原吉門といへる者の偽り傳へしるものにして延
寶の頃黒瀧の禪僧潮音これを刊布せ凡そ七十三卷あり
と月この大神小住居言ふこともあれと其ハ別小辨あれ
ハ此小贅せば

212
2
181



212
181

014674-001-4

212-181

八坂社旧記集録

紀 繁繼/編

1冊

M3

ABB-1108

